

く、宿に到着した時間が何時何分まで書かれてある。秀にとつてそれほど楽しい旅であつたのであろう。旅といえは江戸時代の旅と明治時代の旅が書かれてあるために、江戸と明治の旅の比較もでき、その点からしても貴重な楽しい史料である。

「落葉の日記」の発表を快くお許し下さった二見水亜子様へ心から感謝を申し上げます。

「落葉の日記」は現在、相場雅春氏の手を経て茨城県立歴史館に保存されている。

#### 註

- 1 杉栄三郎他『職仁親王行実』一九三八年
- 2 長沢美津編『女人和歌大系』第三卷 風間書房 一九七八年
- 3 斎藤櫻波編『水戸系譜外感傳』茨城県立図書館蔵（新訂増補 国史大系『統徳川実記』第二編 吉川弘文館 一九九一年）
- 4 筆写本 茨城県立図書館蔵
- 5 鈴木彰「文明夫人の業績について」
- 6 写本 土浦市立図書館

### 女の史料

#### 秩父すむらいの記

東京桂の会（会員十二名）

岩下の磯の子は歌がめにて 荏原のこほり品川のさと人なり はやくより法のつとめおこたらすせし中に 観音はさちをことにたのみ奉りて こゝより程とほからぬわたりにいまするかきりをだに すむらいせむの心ざしさへ深りき かくてたゞそはやもめと成にたれど 世のわたらひにいとまなくて 心のどかになともあらぬを 言の葉の道をもゝてすさびて 其すぢのことども おのれにたづねとひもしつゝ をりくは文つくる事などもせしかば ことしはかのぼさちをがみにちゝぶの山におもひ立て その道すがら見きゝつることをいさゝか物にしるしとめたるが一つの草子めく物となむ成にたる さるはをかしうも あはれにも見どころおはかる心地のすれば 物ゆかしかるひと

- 7 西村文則「水戸烈婦伝―烈公夫人貞芳院」
- 8 同右
- 9 長沢美津編『女人和歌体系』風間書房 一九七八年
- 10 北小路健「水戸藩奥女中の日記」――新資料「落葉の日記」について上中下（歴史と旅）
- 11 斎藤櫻波編『水戸系譜外感傳』茨城県立図書館蔵
- 12 秋山高志ほか『茨城県の歴史』山川出版社 一九九七年

#### 主要参考文献

- 松浦玲『徳川慶喜』中公新書 一九九七年  
木村礎ほか編『藩史大事典』雄山閣出版 一九八九年  
小泉欽司編『日本歴史人物事典』朝日新聞社 一九九四年

くくにもみせまほしくて あながちにそゝのかしつゝかくかた木にはあらせつるなりけり そもしたりがほなるわざとみづからはかたはらいたう思ひためるを 非はおのれこそ得め とよろづにその事とりしたゝめて つとにほいのこと おなしなさけおもふところくにあかむとらせつかういふはたそ 吉田の敏成なり

年頃ねんし奉る観音はさちの所々にいまするをもをがみ奉らばやと 上野の國のちゝふまでもとおもひ立て 八月の末の六日に まだほのくらきに家を立いつ 空もやゝ物のけしき見えわかるゝほと あむたのうちよりとのかたを見出して

たちつゝくたみのかまとのけふりにもきはふみよそ空にしらるゝ

それより市か谷の穴八幡の宮居の前をすぐとて おもはえず音にのみきく宮居をもぬかづきながらすぐるうれしさ

さうしがやといふ御寺に 鬼子母神のいまする御堂をはじめてこれかれをかみ奉るに 此神は子なき人のたのみをかけ奉れば かならずしるしありとうけたまはりしまゝに

ざれごととして

年なみはいそちにちかくよせくれと子安かひえんわか  
身なりやは

ゆきくへ戸田の原にさしかりぬ いとひろき野はらに  
ていはゆる月の入かたなしといふむさし野の名もかゝれ  
はにやと覚えて

ことならはをはなかりしきひとよねているかたしらぬ  
月も見ましを

そこに船わたしのあれはのりたるに またはたちにもたら  
じと見ゆるをの子の馬ひききて みるめのごとわらゝけた  
るもの身にまとひて わびしげなる物かたりなどするを見  
て われはかく女にてあれど 人ふたりみたりしたかへて  
おもふまゝにすゝろありきのせらるゝも 身にあまりたる  
おやの御いつくしみのけそかし とまつなみたさへさしく  
まれて

はかなしと何おもひけんたらちねのふかきめくみのつ  
ゆかゝる身を

わらひとふうまやちに あそひめのなまめくを見て

立よりて折とる人やたえざらん見すくしかたき野への  
さわらび

むさしの一の宮と聞ゆる宮居をもをかみ奉る 折からけふ  
は廿六夜とて かくらのわざをぎするを見て

ねもすみてきねかつゝみのきこゆるはたふとき神の所  
からかも

この夜は大宮のすくにてくり原何かしといふかはたこやに  
やとりぬ あくればとく立出るに いさゝかしくれうちし  
て空のけしき何となう心ほそきに 道いそかせて熊か谷の  
大里やといふにやどりぬ かのすまのうら風にうちりし  
若木の花のふることなどおもひ出て

ものゝふのよろひの袖もぬらしけんほころひかゝる花  
をちらして

同じき八日といふにひるつかたより こゝちにはかになや  
ましうしてしつ心もなきに 高ききにとくやりてとみ屋と  
いふにやとりぬ いとゝこゝちのあしきに 人々の見あつ  
かふも心くるしければ よきさまにとかくまぎらはしつゝ  
あくれば立出て けふなん坂東の札とところとうけ給はりし  
みほとけにふた所までまうてゝ いかほにいてゆある所に  
やどりぬ 心地のますくくるしきに 物もまゐらず と  
みにおこたるへうもおぼえねば いかさまになるわざにか  
とおとなしたきのみなかれ出つゝ からうしてふた夜す

ぎぬ されど猶傷あむる事あまたたび也 かくてなか月の  
二日まであるに えおきあかるへうもあらず このまゝに  
むなしくなるにやあらんと思ふもかなし かの八の宮の山  
ふかうおほし入給ひしふることふとおもひ出て ふた所の  
姫君のいといたくなげき給ひしに 今はとなり給へるぎさ  
みには たいめもし給はざりしはやなど思うたまへやらる  
れば おやもゝたらぬ身は中々うしろやすけにおほえて  
六のみちふみはまよはししての山ちかふほとけのみて  
にひかれて

さもあらん折はかたはらちかき人々いかにつみうへく い  
とほしう思ひやられて

あらぬとか人におほすなそてかけてもるともつゆはき  
えぬものは

とまておもひなりぬれど わすれかたきはかのひともの  
なてし子 いかにさすらふらんとと思ふもかなしくて

あなあはれこれやかきりのかと出ともおもはていかに  
まちこひぬらむ

されどたひの空にて かうさまになりはてんはくちをしう  
もかなしうもおもひ乱れつゝ いてやはかりなき観世音の  
御くりき さしつきてはやくし如来のふかしきなる御りや

くこそひとすちにたのみ奉らめとおもひつよりぬ かたら  
ふへき人はたあらねば 心ひとつにもてわつらひつゝ よ  
し今はこのふた所のみ佛に わか身をまかせたてまつりて  
ともかくもなりなはやくわんたつるほどに 三日のひの  
夕さりつかた いさゝか物参りたるに またのあしたはと  
のかたを見出しなとして こゝ地もすこしなくさめば み  
あつかふ人はさらなり みつからもこの世にまた立かへり  
たるこゝちせられて けにみほとけのしるしはいみじかり  
けりと いともたふとくうれしうなん いつかの日といへ  
るに そのやとりをはなれて 今はちゝふの山にとこゝ  
ろさしぬ この道すからはるなの山の御神をもをかみ奉り  
て

きえはてむものとおもひしつゆのみにかみのめくみの  
かゝるうれしさ

このよはまた高ききのさきの家にやとりぬ 六日のあさま  
たきに このちかきわたりの新清水の観世音にもまうてぬ  
いたうさかしき坂をのほりて

はるかにもねかひはかけしまし水のましてたふときみ  
かけを見る

ゆきくへそれより先に名高き八幡の御神をもぬかつき奉

りて

ゆみやとる身にあらすともあまねかるかみのめくみは  
たれかねかはぬ

こよひはおにしいへる町に いつゝやといふ家のあるに  
やとりぬ いへのさま田舎びずきらくしうつくりなして  
あるしもいになくふすまなどとうてたるに いみじうき  
よげにて いねころもよし こよひはわが家ちに立かへ  
りしこちのせられていと心ゆきたり この家によはひ六  
十あまりにもやと思ふおんなをり こはあるしのをのこの  
はゝになんありける 物いひかはしたるに いらへなとも  
いやしけならで われもはやうちふの御山にまうてしこ  
と侍りき などかたるをきゝてこよなく心なくさみぬ あ  
るしもいとまめやかにみあつかひたり まことや鬼石は名  
のみなりけりと れいのさるがうごととして

聞てたにおそろしと思ふおにしもほとけ心の人はあ  
りけり

明る六日のひは また二所のほさちをも禮拜し奉りて 名  
くらの宿に森屋といふ家にひと夜あかしぬ こゝの家とう  
しもまめ人にて とかく立はしりもてはやしたれど おに  
しのやとりにはなるべうもあらず 鳥の音ましかねてとく

の出ていふ 家あるしに侍るは さはることありて物へ  
ゆきてなきほどなれば やとかし参らせんことはいかでか  
といらふるに さてはいかさまにかせまじと心地もまとは  
るゝを されどすさどもことよけにうちかたらひて から  
うじてやとりになり まことに夢のこゝ地をせられし あ  
やしけなるをしきにて出て物など参る とかくするほどに  
この家の翁ものより立かへりきぬ さきの女なにごとにか  
さゝやきたれば だみたる聲して あなかしこまらうどよ  
くそさしはへ給ひしとて になくもてかしづく こもぼさ  
ちの御とくにかとそでのみぬらし侍りて

おきまとふつゆのうきみもみほとけのふかきめくみに  
あふそうれしき

こよひは九月の八日のひになんありける 家とうしかたら  
ふやうあすはせくにぞ侍るに まらうどたちあかのいひは  
きこしめさぬにか あなかびたるさまにおとしめ給はずば  
つかうまつるべうもやと いとふつゝかなるさまにかたら  
ふもをかし たひながらせくにあふはめづらかなるこゝち  
せらるゝに このまめ人のねんごろにもてかしづくもうれ  
しくて それいとよかなりといらふるに いみじうあみさ  
かえて あくればかいひをしきにもりてさし出づ さる

立出ぬ 心いそぎのみせらるれど けふも今二所にまうでゝ  
ちかひをかけ奉りて かならずとこゝろさしたるやとりの  
あるに一里あまりこなたにてひはくれぬ こゝは川原にて  
水のなかけいとさふにものすこし その前に山ありて こ  
れをうちこきではと里人のいへば ともし火なとしてわけ  
いりぬ さきに心地をこなひて いのちしぬへくおぼえし  
はみづからのみなれど しらなみなどの立より こはむた  
りの人のうへもうしろめだういと物わびし しはしあ  
りてふと見やれば 木の間より火のひかり見ゆ 里ちかく  
なりしにやと嬉しく思ふにさにはあらで こなたをさして  
人のくるけはひしるし やがてちかうなるまゝにいかなる  
ものにかやとやをらうかゞへは 女二人三人うちつらねて  
つほ折すかたつきくしけにて 下をとこめくもの二人  
ばかりして わらぐつにはあらで たかきあしだはきてあ  
ゆみくるさま いとこゝろゆきげなり ちかよるまゝにあ  
ないとはすれば おそろしきも見えて 今しばしがほどな  
めり などいひすてゝいそぐ さるは夜道などにもならひ  
てうしろやすげなるに 心すこしおちぬ ゆきくゝて初  
夜するほとにかの家ぬにつきぬ こゝはにえ河とかいふ  
すくにて この家のあるしはへん見忠兵衛とそいへる 女

ふるまひのかたくなしうをこに見ゆれど まめ心の浅から  
ぬは 玉ともかゝやきつべし けふは七所のほさちをそを  
かみ奉る それか中に廿八番といへるは馬頭尊にぞおはし  
ます そのかたはらの山にいと大きやかなる岩穴あなり  
順禮とてまうづる人は かならず此岩穴に入ることなりと承  
りつたへたるまゝに 心地のいたうおそろしきをもねんじ  
て かいつらねてかの岩むろに入ぬ 聞しよりもくつろか  
にて 物すこきこちはすれと ことなくのほりくたりな  
どして からうじてもとの御だうに立かへりぬ そのよは  
大みやといふすくにて なへや何かしといふがもとにやど  
りぬ こゝにてみよすごして残る所なうぼさちを順禮し奉  
りぬ さるは大宮の里人のたのみをかけ奉るを承りし北辰  
妙見尊の宮居をもをがみ奉るに さる所にいますかるもの  
とも思ふ給へられず なかゝによしありてめづらかなる  
さまし給へれば ともなひたる人々も もろ心にぬかつき  
て ふるさとひとにかりつがばやなどいふもをかし い  
たう神ざひにたる御社のさまもかしこく かたへを見めぐ  
らしたれば 神わざする所にやあらむ つくりさまことな  
るさまして かうくしう神などさしわたしてあるを見て  
をとめ子かかへすたもの入あやも思ひやらるゝさか

きはのかけ

みやしろにむかひ奉りて

野へわけてやつれたたびのそてのうへにつゆのめぐみ  
をいの神がき

なとおもふもあやしけなれど おしこめかたくてなむ そ  
れより十二日といふに大宮を立出て いとけはしき山坂あ  
るは四十八瀬とか里人のいふめる河をもわたりて いそぎ  
にいそぐほどに 七ツ時すぐるころにやあらむ いとひろ  
き川原に出ぬ 船長もあらず かちわたりしてかよふにこ  
そと人々のかたらふを されど川のはゞ五間計もやあらむ  
とおほゆるに あないするをといとあさしやなどいへど  
なほおぼつかうあやふげなり されどかくてあるべうも  
あらねば のり物ながら川中にうち入ぬ こしのほとにも  
つきぬへうおぼえてしづ心なし からうじてみなわたりは  
てぬればこの所にてひもくれぬ 火ともしつれていそぎゆ  
くほどに くろすといへるすくにいたりつきぬ みなとや  
とかいふめる家にやとりになり たゞ一夜のかりふしとお  
もへと 何となう心ゆかねばそらねはからんほとに立出ぬ  
またとのかたはくらくて とみに明はなるべうもあらね  
どけふよりふるさとにかへりむかひなと思へば ある人々

もみな心いさみぬ よ深くつきてほどもなく立出ぬれば  
ところのさまもえ見えず けに所の名にもよるわざなりけ  
りとほゝあまれつゝ れいのされことして

くらしよりくらしに出てみちしはをたとるも名にはた  
かはさりけり

かくて九月の十三日の夕さりつかたになん すみなれしふ  
るさとはは立かへりぬる うからともにきはしうさしつ  
とひて こゝちのなこりなくおこたりはてしよろこひなど  
いふも もろ心にうれしともいとうれし

なか月のこよひのかけはみたねとおもふことたるわ  
か身なりけり

かみのくたりくだくしきことのみなれど 思ふことおし  
こめたらんも中々にやと 萬延のはしめかのえ申の年九月  
十日あまり四日のひにしるしをへぬ あなかしこ ものめ  
かしうよにかゝやかしてんだおもふにはあらじかし

岩下のいその子

この摺巻は はたちあまり五とせはかりのむかし 此書に  
はし書せる吉田敏成ぬしより恵れたるなり 作者磯の子は  
品川のうまや路に相模屋とよひて あそひめあまたを置い  
てかみのしなといはれたる家刀自にて 則よし田ぬしの門

人なりけり かゝるなりはひの人にけなく めてたくも

書なせるものかなとおもふまゝに 其故よしを人にもしら  
せんとて 其をはりに書つけ置ぬ

明治十九年十月陽春庵のあるし

清 □

## 「秩父すむらいの記」について

大井多津子

はじめに

「東京桂の会」では主宰者柴桂子氏の蒐集した旅日記の  
うちから「秩父春む羅いの記」を翻刻した。

著者は品川宿の相模屋（土蔵相模）の家刀自、岩下磯の  
子である。万延元年（一八六〇）八月二十六日から九月十  
三日まで十八日間の旅日記である。

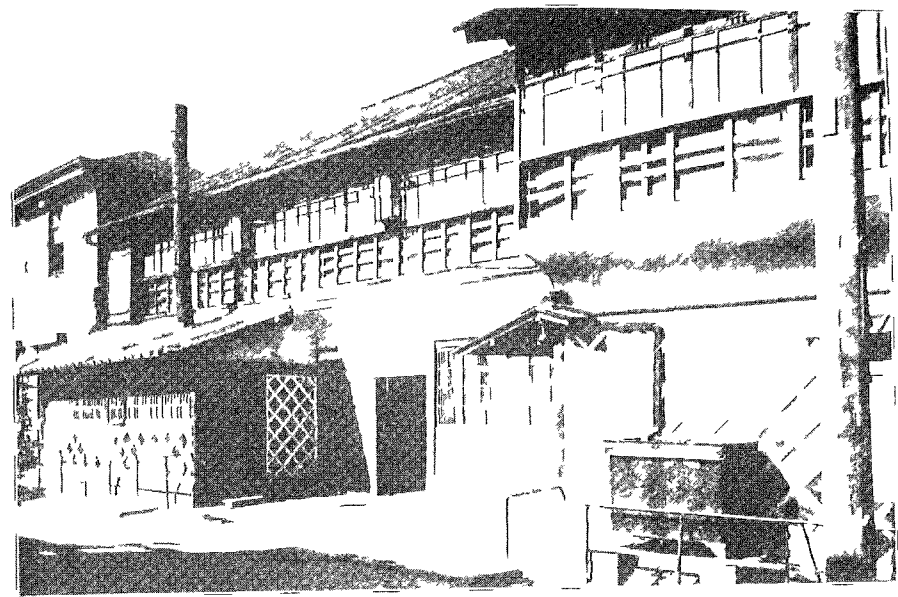
この文書は明治十九年（一八八六）十月に陽春庵のある  
じ漬□が書写したものであり、二十五年前の文久元年（一  
八六一）頃、吉田敏成から贈られたものである。

### 一 品川宿について

『新編武蔵國風土記稿』によれば、品川宿は慶長六年  
（一六〇二）正月に定められた。東海道の宿は以前から集  
落をなしていた所が多く、品川宿も目黒川の河口付近は早  
くから湊町として発展していた地で、中世末期には町並は  
南北に拡がり、目黒川を境に北品川と南品川とに分かれて  
いた。宿を設けるにあたり町並をととのえ、北品川宿、南  
品川宿とでひとつの宿の機能を果たし、後年、歩行新宿ちやうしんしゆく  
ができてからは、三宿で宿役を負擔した。

江戸時代、吉原以外では遊女を置くことを許されなかつ  
たが、品川など江戸四宿には旅籠屋と称して一定人数の飯  
盛女を置くことを許された。しかし御定め的人数は守られ  
ず、過人数召抱え事件がしばしばおきた。明和元年（一七  
六四）道中奉行から「これまで食売女は南・北品川宿では  
旅籠屋一軒に二人、歩行新宿では一人という定法であつた  
が、以来は本宿と新宿の差別なく、一軒に何人と限らず、  
三宿で五〇〇人まではかかえることをゆるす」という申し  
渡しがあつた。

五〇〇人の飯盛女は、南品川宿に一五五人、北品川宿に  
一四三人、歩行新宿に二〇二人ときめられ、さらに一軒ご



相模屋（慶応二年焼失後に再建）

とに定数があったか、天保の改革で大粛正が行なわれたときには、三宿の旅籠屋は九四軒で、飯盛女一三五八人もいたのである。それぞれの旅籠屋で御定めの三倍位の飯盛女を置いていたことになる。このことは、天保十五年（一八四四）正月二十四日「食売女過人数一件諸用留」に詳細に記されている。

飯盛女という名称は、幕府が公用語として食売女または食売下女の語を使用したの、道中奉行から宿々への布達文書は勿論、幕府の記録にも、この語が使用されているか一般には飯盛女・飯盛下女・茶汲女などと呼ばれている。

## 二 相模屋について

相模屋が「土蔵相模」といわれたのは、毎刃見通り座敷かすへて土蔵造りて当時の粋客を驚嘆させたからであり歩行新宿の中で一番多く飯盛女を抱え賑わっていた。

國貞筆「土蔵相模」の絵が残っている。

文久二年（一八六二）十月十三日夜、長川藩の志士等が相模屋に集まり遊興の後、御殿山のイギリス公使館を焼き打ちした。

慶応二年（一八六六）十二月二十六日、歩行新宿宇津屋

貸座敷より出火（俗に宇津屋火事という）土蔵相模も類焼した。その後建てられた家は昭和初期まで残っていた。

## 三 著者岩下磯の子について

『國書人名辞典』によると磯の子は歌人・画家であり、号は翠柳という。娘の岩下翠江斎号菊泉も画家である。

これは『文政文雅人名録』『文久文雅人名録』にも記載されている。磯の子がどのような絵を描いたのかは残念ながら資料としては残っていない。生没年月日も不明である。しかし鬼子母神に参詣したときに「年なみはいそちにちかくよせくれと子安かひえんわか身なりやは」という歌を詠んでいる。五十路に近いという表現から万延元年（一八六〇）頃、四十代後半と推察される。

○頃、四十代後半と推察される。

書写した債□は「磯の子は品川宿であそびめを多く抱えている旅籠相模屋の家刀自だが、このようななりわいに似す上品である」と書いている。

## 四 秩父すむらいについて

題名の「すむらい」について調べてみた。「すむ」は「すむ」「すむ」「すん」「ずん」と調べたところ『角川古語大

辞典』に「ずん」は順とある。「らい」は礼拝のことである。巡礼・順礼のことと考えていいだろう。

序文を磯の子の歌の師である吉田敏成が書いている。師は江戸末期の國学者で、江戸に住み、林大学頭に仕え、そのかたわら加藤千陰・一柳千古・中島広足などに和学・和歌を学んだ人である。「磯の子は歌がうまう、ときには文を書いている。また観世音菩薩の信心深く以前より願っていた秩父すむらいにいて、その道すがら見聞したことを書とどめたものか草紙めくものなので版木にあらした」とある。

万延元年（一八六〇）八月二十六日早朝に旅立つ。品川から北上して市ヶ谷の穴八幡、雑司が谷の鬼子母神に詣て戸田の原、蔵宿を過ぎ大宮宿に泊まる。

市ヶ谷穴八幡は江戸八所八幡のひとつで、鎌倉鶴ヶ岡八幡に対して亀ヶ岡八幡ともよぶ。（『文政江戸町細見』）

雑司が谷の鬼子母神は現在でも子授けの寺として参詣する人が多く、ざれごととして五十路に近くと詠んだのであろう。戸田の原は「春の頃は桜草をたつね掘る人あり」（『袖鏡』）とあるように荒川まで一面の野原であった。現在でもその付近の人々は桜草を大切に育てている。

蔵宿は戸田の渡しで揚げられる物資の中継地にもなつてにぎわっており、渡しが出水で渡れない時はここで泊まる旅人も多くいた。磯の子はなまめかしいあそびを見て「立よりて折りとする人やたえさらん見すぐしがたき野べのさわらび」とわらびの掛詞をつかい歌を詠んでいる。

江戸初期の大宮宿では、武蔵國の一の宮である氷川神社の参道が中仙道であった。この日は廿六夜で神楽をみて「ねもすみてきねかつゝみのきこゆるはたふとき神の所からかも」きねとは巫女のこと、鬱蒼とした木々の間から巫女の打つ鼓の音が聞こえるようである。

品川から大宮まで直線距離ですら三十五・六キロもある。駕籠に乗ったとはいえず疲れたことと思う。

二十七日 朝からしぐれていた。道を急がせて熊谷に泊まる。ここは鎌倉時代から熊谷次郎直実の所領地として知られた所で、敦盛を討ち取った事は平家物語でも名高く、それを思い出し「ものゝふのよろひの袖もぬらしけんほころひかゝる花をちらして」と詠んでいる。

二十八日 熊谷より秩父道があるが、中仙道に行く。昼頃より気分が悪くなり高崎に泊まる。ここは松平右京亮八万石の城下町である。

おそろいと思ふおにしもほとけ心の人はありけり」と詠んでいる。

七日 日付を間違えて六日となっているがこの日は二カ所の菩薩に詣で、名倉の宿に泊まる。この宿は不明であるが森屋という家に泊ったと記されている。

八日 二カ所詣でると記述されているだけで、何処の寺か不明である。この夜予定をしていた宿に着く前に日が暮れてしまい、ひとつ山を越えなければならぬ細い思いでいるとき木の間より火のひかりが見え、里近くなったのかと嬉しく思った。それは近づいてくる女二・三人と男二人の持つあかりであり、「宿はもう少し」といわれ心が落ち着き、今の午後八時過ぎ頃贅川の宿にたどり着いた。明日は菊の節句なので赤の飯はいかがか、と聞かれ旅先で節句にあうのは珍しいこと、家刀自の心遣いもうれしく喜びの気持ちで素直に書かれている。贅川は『新編武蔵國風土記稿』に「家並三十六軒ならび寛文七年（一六六七）から毎月二・七の六斎市がたった」とある。

九日 朝餉に赤の飯をおしきに盛って出された。この日は七カ所詣で、秩父大宮に泊まる。その中で二十八番橋立寺だけは三十四カ所の内唯一の馬頭観音である。

二十九日 気分が悪いが従者たちに気を遣い、伊香保へ行く。途中坂東札所二カ所に詣でる。寺の名は記されていないが、十五番白岩山長谷寺、十六番五徳山水沢寺と思われる。

三十日から九月二日まで病の床に臥す。旅先の病に心も弱くなり、このままはなくなるのかと思ひ「あなあはれこれやかきりのかと出ともおもはでいかにまちこひぬらむ」ほか二首の歌を詠み、ただ観世音菩薩にすがると記している。病名はわからない。

九月三日 夕方、すこしものが食べられるようになり、この世に立ちかえった心地がし、これもみほとけのしるしと思う。

五日 伊香保を立ち秩父へと向かう。途中榛名神社に詣で「きえはてむものとおもひしつゆのみにかみのめくみのかゝるうれしさ」と喜びの歌を詠んでいる。高崎に戻り二十八日と同じ宿に泊まる。

六日 高崎の清水寺に詣で、鬼石<sup>おにし</sup>に泊まる。清水寺は昭和の初期、観音山にたてられた白衣観音の近くにある。鬼石は藤岡から秩父に入る秩父往還のひとつである。鬼石の宿は居心地もよくわが家に帰ったようである。「聞てたに

十一日まで三夜大宮宿に泊まり、札所全て詣でたと記してあるが、道順は書かれていないし、歌も詠まれている。ひたすら観世音に祈るのみだったのか。大宮の里人の北辰妙見尊の宮居に詣でた時二首歌を詠んでいる「野へわけてやつれたたびのそてのうへにつゆのめぐみをいの神がき」十二日 黒須の宿に夜遅く着き泊まる。現在の入間市である。

十三日 家路に思うと心もそろなのであろう、夜も明けきらぬうちに宿を出て近く景色も見えず「くらきよりくらきに出てみちしはをたとも名にはたかはさりけり」と詠み、夕方十八日間の旅を終え品川の家に戻り着く。磯の子は勿論、同道した者、迎える人々の喜び、安堵感はおおきかったことと思う。「なかつ月のこよひのかけはみたねともおもふことたるわか身なりけり」と詠み「十四日にしるしをへぬ」と結んでいる。

秩父三十四カ所の観音霊場（秩父郡市六カ市町村）は、坂東三十三カ所、西国三十三カ所と共に日本百番観音に数えられている。

秩父札所のおこりは、遠く文暦元年（一二三四）甲午三月十八日開創と伝えられ、長享二年（一四八八）の秩父札

所番付（札所三十三番般若山法性寺蔵）が実在する事から既に室町末期には秩父札所があったと考えられ、江戸時代になると観音信仰は庶民の心の支えとして流布し、隆盛を見るようになった。

### おわりに

秩父札所は一巡約一〇〇キロの行程である。私は十数年前に日帰りで、土地の人達と言葉を交わしたり銀杏を拾ったりしながらゆっくり風景を楽しみ、ハイキング気分ですわをした。三十四カ所すべてを巡るのに結局通算七回かかった。三十一番から三十二番まで十キロ、そこから三十三番まで七キロ、またそこから三十四番まで九キロと案内書に書いてあるので、徒歩で巡るのは諦めてタクシーをつかった。静寂な山村と美しい自然の風光を背景に、急な山坂あり谷あり、御堂は見えていても頭の上のさらに彼方にあり苦労したことを思い出し、江戸時代の旅の大変さに思いを馳せた。

磯の子は途中体調をくずして伊香保温泉に滞在したり、宿に着く前に日が暮れ夜道を急いだり、乗物のまま川を渡ったり、他にも書き残されることのなかったさまざまな出来

事があったであろう。天候の事は一カ所しか書いていないがどうだったのか。歌は二十首詠まれているが、秩父札所では一首も詠まれていない。伊香保での四日間の滞在は予定外の事と思われる。その為心急ぐまま札所での歌も詠まじまじになったのではないだろうか。或いは帰宅後削除してしまったのだろうか。さまざまに思い巡らされる旅日記であった。

### 参考文献

- 東京都品川区編纂・発行『品川区史』一九七三年  
品川町役場『品川町史』一九三二年  
品川区教育委員会『近世の品川・美術編』一九七〇年  
『古典籍総合目録』岩波書店 一九九〇年  
『安政文雅人名録』  
『文久文雅人名録』  
永田宗二郎編纂『品川遊廓史』一九二九年  
大塚稔『文政江戸町細見』  
特別展江戸四宿実行委員会『江戸四宿』一九九四年  
今井金吾『今昔中山道独案内』一九九六年  
『街道物語 中山道』三味堂  
秩父札所連合会監修『秩父札所道案内』

## 書状で見る藩主側室えらび

### 鳥取近世女性史研究会

書状一 天保九年閏四月二十四日

追而奉啓上仕候。扱御伽女中之儀

先便ニも申上候通精々穿鑿

仕候得共宜敷人物無御座

近來は伏見竹田邊迄を

欠渡り候処器量何れも大体ニ

御座候得共或は身持不立又は

年之過不足御座候而思わ敷

無御座或は親年久敷悪疾

相煩杯色々之申分御座候而

誠ニ以心痛仕候。先便申上置候

西谷娘よりも今少し家柄宜敷

人物相伺申度段々工夫面

仕候得共とかく家柄宜敷者は

器量不立其上漸諸方へ

穿鑿行届候様子ニ而口入之者

七人も御座候所近來は同人を

七八人も書出し候。左候得は限有ル

事と相考候付是迄見分仕候者ヲ

五六拾人之内撰出し三四人見分

仕候。其内加茂ニ而左之人物親元も

宜敷ニ付幸複並助之丞親

類之者御座候付引請させ候而身上

筋目等取糺候処何之子細も

無之趣申達候。加茂えは悪疾之

筋之者も御座候様承居候付其儀ヲ

格別ニ穿鑿仕候様申聞候由

入念穿鑿仕候由御座候。容儀

左之通ニ付御賢考可被遣候。

蔣池遠江守娘

ふさ

十六才

顔丸良之内少し長キ方

色中位之所

目元愛らしく

鼻筋通りはへ際常体

口元常ニ少々あけ居候 目ニ立候

程ニは無御座候

せい格好歳相応

風俗よろしき方

中肉

右之通ニ御座候。惣駄之器量振ハ

西谷娘ニは余程おとり居申候。

何分愛らしき人物ニ而御座候様

見請申候。右之外段々穿鑿

仕候得共思わ敷無御座當時は

先宜敷者無之様子ニ而御座候。

追々日を懸ケ候而取糺候は